

鈴木寛・文科副大臣と嘉山孝正・NCC理事長が講演

第2回「現場からの医療刷新についての勉強会」レポート



多忙な中、講師を務めていただいた鈴木寛・文科科学副大臣(左)と嘉山孝正・国立がん研究センター理事長



医療現場の問題について話し合う南淵明宏・大和成和病院院長(右)と鈴木邦彦・日本医師会常任理事



嘉山NCC理事長(右)に民間医療保険の重要性を訴える須藤康夫・MS&AD基礎研究所社長



参加者からは質問が相次いだ



少人数でクローズドな場ならではの距離感

昨年の衆議院選から1年を経過した8月31日、東京・港区の「料理王国アカデミーサロン」で、弊社主催の第2回「現場からの医療刷新についての勉強会」を開催した。今回は第1回に続いての登場である鈴木寛・文科科学副大臣に加え、国立がん研究センター(NCC)理事長の嘉山孝正氏を講師に招聘。会場には医療関係者を中心に約20人の参加者が集った。

まずは鈴木氏が地域医療をテーマに講演。政権の中核を担う激務の中、近頃の課題である2011年度予算の概算要求の成果も盛り込んだ資料を用意。相変わらずの現場主義が旺盛な内容で、民主党政権の政策の柱が、医療をはじめとする社会保障や地域主権にあることがあらためて実感された。

続いて嘉山氏が登壇。4月から独立行政法人化されたNCC刷新の現状について熱弁をふるった。これまで国の機関として厚生労働省の管轄下にあった組織を独法化することで、どんな変化が生じているのか。弊誌の誌面でもこれまでお伝えしてきたが、当事者の言葉で事例を交えながらの解説は説得力十分。独立行政法人改革・医療制度改革双方の象徴といわれるナショナルセンター改革は、つまるところ「すべての活動は患者のために」というNCCの新たなキャッチフレーズに帰結するものといえそうだ。

講演後は講演者と参加者による質疑応答の時間。医療政策立案のキーパーソンに直接質問できる貴重な機会に次々と挙手する光景が見られた。質問はいずれもプロフェッショナルらしく、現場での課題に即した具体的なものばかり。難題にも真摯(しんし)に対応する講師の言葉にフロアは聴き入った。終了後の懇親会では参加者同士の交歓の輪が広がっていた。